

目的 被服デザインにおいて、被服開口部以外の切り開きは主に着脱の為にあると考えられるが、それがデザインを制約する場合もある。しかし着脱の行為は被服の使い勝手の上で軽視されてはならない。本研究は着脱の仕易さと被服のあき量との関係を明らかにする目的で、伸縮性の異なるニット布と織布のワンピースの後あきを例にとり、着脱時の布に生ずるひずみの面から着脱抵抗を検討した。

方法 (1)着脱方法：被験者は左腕、右腕、頭部の順に通って着衣し、立位姿勢後衣服の下部を掴んで腕を交叉して脱衣する。被験者は3名で各々3回の繰返し実験を行った。(2)あき量：後身頃の正中線を上から0, 10, 20, 30cmの深さに切開する。(3)着脱時の布の歪み量：ワンピースの各部位にとりつけた未延伸系の歪み量から推定した。ニット布は未延伸系を縫い込み、織布は布を切開してゴム系に未延伸系を合せて閉じつける。(4)計測部位：ニット布では体幹部をタテヨコに細分し、織布では乳頭線、肩甲線上を5〜6区分した。

結果 (1)一般に脱衣時よりも着衣時の未延伸系の伸びが大きく、またタテ方向よりもヨコ方向の伸びが大きい。(2)ニット布地は各部位の歪み量が大きく、切り開き長さの影響は前後身頃共に胸囲線上の伸びが切り開き長を増すと著しく減少する傾向が大である。また前身頃よりも後身頃の歪みが切り開き量の影響を受け易い。(3)織布においては前後身頃共に胸囲線の歪み量が大きく、かつ切り開き量による減少度も著しく大である。前身頃では腹囲線も同じ傾向を有するが歪み量は少ない。後身頃では逆に下部胸囲線に切り開き量の影響があらわれる傾向がある。